



## を 読 む

河合文化教育研究所 主任研究員 丹羽健夫

**久**しく逢うことのなかった昔の友達、頑固だけど熱い心を持ち、自分の道をまっしぐらに走って行った、あの懐かしい友達に逢ったような、そんな感慨を与えてくれる本である。

**高**村光太郎の智恵子抄「レモン哀歌」が出てくる。宮沢賢治の「永訣の朝」が登場する。丸山薫の「汽車に乗つて あいるらんのやうな田舎へ行かう・・・」に、ふむふむと頷く。室生犀星の「ふるさとは遠きにありて思ふもの」が、また中原中也「サーカス」の「幾時代かがありまして 茶色い戦争ありました」が・・・。

**さ**らに立原道造、三好達治、中野重治、与謝野晶子、八木重吉、北原白秋、佐藤春夫など、本書の近代日本詩編には40数名の詩人たちの50編あまりの作品が華麗におさめられている。

**そ**れにしても学校で教えられる芸術作品は、ことが数学や物理のように論理の世界ではなく、感性の世界であるだけに、教えられたときの邂逅の仕方、その後の生徒たちのその芸術分野へのかかわり方に、さまざまな道程を与えるのではなからうか。あるものは素直に感動してとけ込み、あるものは試験でよい点数を取るための労役の対象として、これを最後にその後のつき合いを一切絶つなど。学校での芸術作品の取り上げ方は、きっと繊細でやっかいなものなのだと本書を読

みながら、つくづく思う。

**ま**た、この本を読んでいて、いくつかの奇妙な事実にも気付く。ひとつは、本書の詩は1996年（平成8年）までの中学・高校の国語教科書から選んだとあるが、少なくとも詩編には恋愛歌がほとんど登場しないことだ。やっと見つけたのは島崎藤村の「初恋」と、北原白秋のこれも「初恋」。検定教科書の検定者たちは、中高生には恋愛歌は未だ早い、と考えているのだろうか。

**い**まひとつの疑問は、新しい作品がほとんど無いことだ。確かに明治の近代国民国家日本が発足して以来、言文一致の試みなど先人たちの試行錯誤や、さまざまな挑戦の結果50～60年という短期間のうちに、日本語・日本文は奇跡的に磨きあげられた。そして1930年前後の10年間にそれが精華に達し、この本の作品群の多くがこの時期の詩人によるものである。しかし日本の美しい詩歌はこの時点で登り詰め、それ以来現在に到る約80年間は虚脱状態が続いているのであろうか。

**い**や、そんなことはない。1970年代のあのフォークソング隆盛期を見直してほしい。ギターという新兵器を伴ってではあるが、百鬼夜行のごとく輩出した若いオトコ・オンナたちが、百花繚乱のごとくに詞歌を歌いあげていたではないか。それもこの本にある1930年前後の絶頂期の詩人たち

の詩魂・美感を明らかに受け継いで、だ。

**極**端な受け継ぎは、武田鉄矢の「思えば遠くへ来たもんだ」の「・・・14の頃の僕はいつも、冷たいレールに耳をあて・・・」が、中原中也の「頑是ない歌」の「思えば遠く来たもんだ 12の冬のあの夕べ・・・」にとても近いことでも分かるだろう。この例は極端にしても、小椋佳の「シクラメンのかほり」「ためらいがちにかけた言葉に 驚いたようにふりむく君に 季節が頬をそめて 過ぎてゆきました・・・」などは、筆者には三好達治や北原白秋の風韻を感じさせるのだ。

**伝**統の継承云々はともかくとして、北山修「風」、阿久悠「五番街のマリーへ・ジョニイへの伝言」、荒井由美「卒業写真・いちご白書をもう一度」、さだまさし「精霊流し・無縁坂・秋桜」、伊勢正三「22才の別れ・なごり雪」、その他中島みゆき、谷村新司、松山千春、森田童子、阿木耀子、五輪真弓、井上陽水などなど、あの10年間は明らかに日本の詩歌の絢爛たる時代を画したといえよう。あのフォークソングの詩たちは、文学上の詩として認められていないのであろうか。教科書に載せるには身分が低いというのであろうか。

**こ**んなことまで考えさせる、奥の深い一冊である。

日本音楽著作権協会（出）許諾第0810422-801号



◀「教科書でおぼえた名詩」  
文藝春秋編 文春文庫PLUS  
定価 本体505円＋税